

## 獨逸浪漫主義の生活原理（上）

——感情的主觀性と想像力！——

吉田 忠 勝

### 一 序・感情的主觀性

浪漫的なるものは、いわばそこはかとなき一種の氣分であるかもしれない。浪漫主義とは、その様なものを標榜するまことに複雑なる概念であり、その本質は把握し難い雲煙の如きものでもあろう。けれども、十八世紀末より十九世紀初頭にかけて展開されたこの一つの時代思潮が、他のそれと異なる獨自の生活態度を形成したことは、否み得ない事實であり、その生活原理を探ることは、必ずしも不可能ではないと考えられる。

成程浪漫主義の萌芽は、すでに古典主義の中に胚胎していた。即ち、F・シュレーゲルが近代詩の獨自の形式としてロマン Roman を考察した際、その最もロマン的 romanisch なるものを見出したのは、ほかならぬ『ウィルヘルム・マイステル』に於いてであつたし、シラーの詩と戯曲も、その自由性と反逆性によつて、浪漫主義運動に強い刺戟を與えた。更にシラーの「遊戯 Spiel」(Schiller: Über die ästhetische Erziehung d. Menschen. 15. Br.) 思想は、異なつた解釋の下にせよ、浪漫的生活の據り所となり、また彼の「情感的 sentimentalisch」(Schiller: Über naive u.

sentimentalische Dichtung)なる概念も、失われた調和への憧憬たる意味に於いて、すでに浪漫主義をば豫告するものであつた。或いは、ヘルデルリンがヒュペリオンの懐れる女性として、同様にF・シュレーゲルがカロリーネをモデルとして、ともにギリシャ的容姿の典型ディオティマを描くところにも、明かに浪漫主義者の古典主義的性格が窺われる。しかしながら、ただその故を以つて、浪漫主義を古典主義の單なる展開部分と解釋する(Walter Siz: Early German romanticism)ことは、もとより許さるべくもあるまい。『マイステル』を殊のほか愛好したノヴァーリスも、次第にそれを彫塑と節度と限界とを指す非浪漫的なるものとして非難し、やがて「詩の神化」としての『オフテルディンゲン』をば、ものするに至つた。事實『マイステル』には、浪漫主義にみられる如き、病的な暗い陰は認められない。古典主義的人間が、人間自身を萬物の基準とみなし、一瞬の現在に永遠の法則を追求したに對して、浪漫主義的人間は、自己を超える無限的なるものへの奉仕に献身し、法則なき不斷の生成の中に、自在性と獨創性を求めて止まなかつた。古典主義が模倣的規範的な「鏡」であるならば、浪漫主義は自由創造的な「燈火」(M. H. Abrams: The mirror and the lamp; Romantic theory & the critical tradition)であり、一方が安靜と調和の中に佇むならば、他方は不安と憧憬の中に搖らぎ續けるのである。従つて浪漫主義は、本質的にはあくまで、古典主義と異なるものといわねばならない。他面また、啓蒙主義が舊來の因襲を無視する點に一つの特徴を有するならば、同様に世俗や傳統への反抗的態度に於いて、浪漫主義が所謂「啓蒙主義の子」と呼ばれることも、強ち不當ではないであろうが、しかし兩者の差異は、前者が悟性萬能の客觀性の立場であるに對し、後者が感情性に基づく一種の主觀主義たる點に存する。「ヒュペリオン」や「ペンテジレーア」や「オフテルディンゲン」を驅り立てたものは、無限的な愛と憧憬の旋律であり、浪漫主義の最初の理論的支柱は、個人的なるものとして解釋し直されたフィヒテの「自我」であつた。その意味に於いて浪漫主義は、むしろ同じく反啓蒙主義的主觀主義たるシュトゥルム・ウント・ドラングに、最も近いものとも考えられる。啓蒙的主知主義に對する非合理的感情主義の運動は、ルソーとヘルダーからシュトゥルム・ウン

ト・ドラングを經、古典主義を跳び越えて、浪漫主義によつて繼承されたのである。とはいへ浪漫主義は、直ちにシュトゥルム・ウント・ドラングと同一ではない。兩者の間には、何らかの決定的相違點が觀取される筈である。いま、コルフ (Korff: Humanismus u. Romanik) とともに、啓蒙主義を悟性中心の客觀主義、シュトゥルム・ウント・ドラングを創造的天才的力 *schaffende geniale Kraft* 中心の無制限的主觀主義、そして獨逸古典主義を形成的倫理的力 *bildende sittliche Kraft* 中心の新しい客觀主義として把握するならば、それに次ぐ獨逸浪漫主義は、果して如何なるものとして理解さるべきであるか。いうまでもなく、その全貌を單なる幾つかの類型的概念を以つて把握せんとすることは、無謀且つ徒勞であろうが、ここでは問題を主として初期獨逸浪漫主義の生活原理に限り、ノヴァーリスとシェリングとを繞つて、注目すべき二三の點の考察を試みんとするのである。

「人間は夢みる時は神であり、考える時は乞食である。」(Hölderlin: Hypenon) 意識下の世界は、シューベルト (G. H. v. Schubert: Symbolik des Traums) の影響下に、浪漫派の殆んどすべての作家によつて注目された。ノヴァーリスの『青い花』やクライストの諸作品 (Käthchen von Heilbronn, Prinz Friedrich von Homburg, など) には、夢遊病現象が取り上げられ、ホフマンは、寫實的手法の中に忽焉と意識下の世界を現出せしめることによつて、夢と現實との境界を縫う特殊な境地の開拓に異彩を放つた。またシュライエルマッヘルは、藝術のあらゆる要素を夢の中に見出し、夢に於ける諸形象の恣意的流れが、それに反抗する沈思 *Besonnenheit* の作用を通して、秩序正しい關係に整理固定化されるところに、藝術作品の成立を捉えたのである。そしてかかる意識下の世界への關心は、好んで童話という表現形式を採つた。「我々が自らを或る妖精の世界の中に見出さないのは、我々の器官と自己接觸との無力によるにすぎない。一切の童話は、何處にもあつて何處にもない、あの故郷の世界の夢にほかならない。」(Novals: Fragmente) ノヴァーリスの考えた眞の童話の精神は、『マイステル』の散文性に對する、『オフテルディングゲン』の夢幻性と無拘束性に於いて觀られる。では、この様な夢や童話の重視によつて、浪漫主義は何を追求せんとしたのであるか。

「童話の中に、私は最もよく私のゲミュート Gemüt の律（レイトナ）調（トナ）を表現し得ると信じている」（Novalis: Fragmente）、或は「詩はゲミュートを刺戟する術 Gemütsregungskunst である」（op. cit.）などの言説よりして、浪漫主義藝術に於けるゲミュートの役割は、ほぼ推察せられるであろう。「感情が一切である」（Goethe: Faust.）といひ、豎琴弾きやミニヨンに漂うゲミュートの故に、浪漫主義者からも優れた詩人と目されていたゲーテが、それにも拘らず「シユテルンバルトにかぶれること Sembalieren」を極力非難したのは、ヴァッケンローデルやテークが自然描寫に際してすらも、自然に對する主人公の情緒や氣分の描出に徹した、餘りにも強いゲミュート追求の態度の故であつた。また浪漫主義藝術に於いて特に音楽が重視された所以も、音楽が全藝術中最も心情的なる點にあり、浪漫的音楽は、感情の深い餘韻と夢幻に誘う憧憬とによつて、音楽史上一大隆盛期を劃している。かくてゲミュートは、あらゆる浪漫主義藝術の最奥の本質を成すと同時に、「全精神力の調和——全靈の同一調子と調和的遊動」（Novalis: Fragmente.）として、人間精神の中心であり、「我々のゲミュートに於いては、一切が最も固有な、最も快い、最も生動的な仕方と結合されている」（op. cit.）のである。そして更にノヴァーリスは、ゲミュートを以つて宇宙萬象の本質をも捉えんとする。「それは非常に理解し易い——何故一切が遂には詩になるかといふことは。世界は、遂にはゲミュートにならないか。」（op. cit.）ここに至つてゲミュートは、單なる個人的心情であることを超えて、宇宙的なる「靈」〔絶対的物質——精神の原始的エレメント＝靈〕（op. cit.）の有する、一種の熱氣を意味する。しかもそれは、「灼熱の中にすべての固い形式と姿と思想とを焼き盡くす」（G. Brandes: Die romantische Schule in Deutschland, S. 196）如き、烈しい焔であるよりは、むしろ一切を、そこはかとなく匂わせ、縹渺の中に漂わせ、幽幻奇怪の中に融かし去る、うすら冷い熱氣である。個人的意識は、かかる宇宙的ゲミュートの「轉調 Modulation」（Novalis: Fragmente.）であり、その世界靈の響きに融入参畫することによつて始めて、自らもまた對象的世界を「浪漫化する romantisieren」（op. cit.）ことが出来る。即ち「一般的なるもの」一つの高い意義を、通俗的なるもの「一つの神秘に満ちた姿を、知られたるものに

知られざるものの品位を、有限なるものに一つの無限的外觀を與える」(op. cit.) ことが出来るのである。

「魔法的觀念論」(op. cit.) を形成した右の如き極度の感情性は、同時に強度の主觀主義を成立せしめる。それは、外的權威への反抗として現われるのみならず、より深くは自己内世界への沈潜として凝集した。古典主義が「外界への活動性」の立場、換言すれば、人間が世界を知ることを通して自己を知り、宇宙の全き把握に自足完了する「外化 Entäußerung」(F. Strich: Deutsche Klassik u. Romantik. Mensch.) の立場であるに對し、浪漫主義は「内面への觀照性」の立場、即ち精神が内的世界の不可測的時間へと驅られて自己自身に無限の反映を繰り返し、同時にそれが自己の故郷への回想として無限の憧憬を喚起する如き、「内化 Erinnerung (Erinnerung)」(op. cit.) の立場である。

幾歳とも知らぬ旅の後遂にイージスの女神(宇宙の根源)の在處を探り當てた若者が、おもむろにその面纱を掲げた時、そこに見出したものは——深い悔恨と禍の意識」(Schiller: Das verschleierte Bild zu Sais)ではなくて——故郷に遺せる愛人ローゼンブリューテであり(Novalis: Die Lehrlinge zu Sais. 2. Die Natur.)、或は「我自ら」(Novalis: Distichon)であつた。坑道口に掲げられた「汝自身を知れ」の教示(Novalis: H. v. Oferdingen.)も、所謂無知の知とは逆に、豊かな寶庫としての内面的自我に歸り行かんとする浪漫的人間の生活指針であり、遍歴を重ねて探し求めた「青い花」が、究極に於いて自己自身の心の裡に見出されたということも、自己認識の中にこそ世界認識があることの證左であつて、『オフトエルディングン』は全體として、畢竟郷愁と歸郷との詩化以外のものではなかつたであろう。フィヒテの自我の哲學の影響下に、哲學もまた「郷愁」(Novalis: Fragmente.)にほかならず、「内部への沈潜、内部への洞察は、同時に登昇であり、天へ昇る行爲であつて、これこそ眞に外的なるものを觀ることである」(op. cit.)と考えられた。

しかしながら、内面的觀照が同時に外面的觀照であり得る爲には、その自我は、單なる特殊的自我であつてはならない。事實、浪漫主義に説かれる自我は、本來的には超個人的なるものであつた(後には個人的恣意的なるものに墮しゆくのではあるけれども)。例えばノヴァーリスが、「我々は全く我でない。しかし我となり得、またなるべきであ

る」(op. cit.)といひ、「我々の所謂我は、我々の眞の我でなく、唯その反映にすぎない」(op. cit.)と語る場合の「我」は、明らかに特殊的個我とその対象たる客觀的自然とを包括する、いわば絶對的なる自我である。ただそれは、フィヒテの「絶對的自我」の如き涵濁せるものではなくて、固有の自然觀に支えられた、宇宙の根源的生命を指すものであつた。浪漫主義者達は、ブルーノやスピノザの汎神論を受け繼いだヘルダーやゲーテの自然有機體説、或いは人生のあらゆる事象の背後にあつてこれを包み、マイネッケによつて「ランケの神と同一のもの」(Meinecke: Vom geschichtlichen Sinn u. vom Sinn der Geschichte. 5.)とも解されたシラーの自然概念(Schiller: Der Spaziergang.)などの一連の有機體的自然觀に影響されしつゝ、これを更に極度にまで推し進めた。シェリングによれば、「あらゆる物質は根源的には流動的であり」(Schelling: Darstellung meines System der Philosophie. § 54. S. 147) 生命あるものであつて、客觀的自然と主觀的精神とは、ともに根源的自然の所産として本質的に同一である。そして自然と精神とのこの共通の根源は、不斷の創造活動たる能産的自然として、換言すれば「世界を體系にまで形成する有機化的 organisierend原理」(Schelling: Von der Weltseele.)たる世界靈——これはゲーテの世界靈思想成立の重要な契機となつた(Goethes Brief an Schelling. Sep. 27. 1800)——として把握せられた。そしてこの様に自然哲學期に於いて、能産的自然がその所産たる人間精神に至つて自己自身を反省せんとする、自然から精神に向かう創造活動として叙述されたものは、次いで觀念論期に於いては、根源的なる絶對的自己意識が、實在的なるものと觀念的なるものとの合一關係を通して繼起的に展開される、精神から自然に向かう逆方向の過程として説かれ、更に同一哲學期に於いては、實在的なるものと觀念的なるものとの絶對的同一性が、相對的なる自然と精神とに同等に現象する統一的過程として示される。この事は明らかに、自我と絶對者との根源的同一を物語るであろう。同様にノヴァーリスは、ペーメを想わしめる神秘主義的汎神論によつて、「有機的形衝動 organischer Bildungstrieb」(Novalis: Fragmente.)としての宇宙靈を説き、かかる萬象の根源をば、「水晶の波 die kristallene Woge」(Novalis: Hymnen an die Nacht. 4.)とも呼ばれる宇宙遍在的な原

始液體 *das Urflüssige* (Novalis: *Die Lehrlinge zu Sais. 2. Die Natur.*) として捉えた。そしてそれは、一面自然の水銀や溶解金屬として存在するとともに、他面「我々の裡なるかの原始的靈漿」(a. a. O.) として現われるのであつて、ノヴァーリスに於いて最高のものたる感情は、この原始的靈漿の様々なる融解動搖であり、畢竟ノヴァーリスの自己性は、宇宙の根源的の生命の主觀的側面にほかならなかつたのである。浪漫主義のかかる極度の有機體的的自然觀によつて始めて、ゲミュートが個人的情緒でありつつ、同時に宇宙靈の熱氣を意味し、宇宙の根源が、人間精神のうち流動的なる感情に於いて最もよくその姿を顯わにする所以が、示されるのであつて、「私の外にあるものはまさに私の内にあり、私の内にあるものはまさに私の外にある」(Novalis: *Fragmente.*) という浪漫主義的主觀主義が、必ずしも單なる個人的自我性の主張に盡きるものでない所以も、これによつて理解されるであらう。しからば、かかる浪漫主義的自我性の本質的力は、如何なるものとして理解されるべきであるか。

一般に浪漫主義の本質の一つは、天才の獨創性であつた。「ヴォルテールに従えば、天才とは單に聡明なる模倣に過ぎないが、ルソーに従えば、天才の第一の特徴は模倣の拒否である。」(L. Babbitt: *Rousseau and Romanticism.* p. 34) このルソーの流れを汲む各國の浪漫主義者達が、反ヴォルテールや非ポープの旗印の下に求めて止まなかつたものは、舊い規矩や詩的措辭を打破する、天才の獨創性であり自發性であつた。けれども、シュトゥルム・ウント・ドラングの中心的能力もまた、ほかならぬ獨創的天才であつたとすれば、兩天才概念の間には、當然何らかの差異が見出されねばならぬ筈である。即ちシュトゥルム・ウント・ドラングの天才が、夢幻的な靈感にうたれ、自由奔放な翼を擴げて無制限な創造活動を推進する、いわば前方のみをのぞむ無意識的な暗き衝動であるに對し、浪漫主義の天才は、無限的創造の過程に於いて屢々自己を顧省し、常に自己を掌握しつつ意のままに活動せしめんとする、いわば後方を振り返りつつ進む意識的性格をば有する。例えばかの浪漫的イロニーが、それを物語るであらう。周知の如く浪漫詩は一切の實在的・觀念的關心から獨立に、表現されるもの(作品)と表現するもの(作者)との間を、詩的反省の翼に

乘つて浮遊し、それによつて作者は、自己の創作活動そのものを反省し、かかる反省的自己を更に反省して無限に反省を重ねる（フィヒテの自覺構造の美學的應用）のであるが、この浪漫的イロニーは、一面客觀に對する主觀の優越の消極的（冷嘲的・諦念的）自覺であると同時に、他面また「現象の虛無性」（Solger: Erwin. Bd. II. S. 280）の自覺に於ける、無限的理念へのいわばゾルゲルのな積極的探究をも意味した。従つて本來のそれは、一應現實輕視の態度でありながらも、單なる感情的奔放に終る空想性とは異なり、むしろ絶えざる幻想の破壊として遙かに意識的である。かかる意味に於いて、浪漫主義の天才概念は、多分に自覺の意味を有するものといわねばならない。

元來天才は、カントの所謂「主觀の内なる自然 die Natur im Subjekte」（Kant: K. d. U. §46. S. 382）として一方藝術家の主觀的能力でありながら、他方「自然がそれによつて藝術に規則を與える天賦の心的素質」（a. a. O.）たる意味に於いて、「それ自身自然に屬する」（a. a. O.）ものと考えられ、ここにこそ天才が人間と自然、主觀と客觀、意識と無意識との統一者たる所以が存したのである。更にシェリングが、藝術を「無意識の意識」として把握する場合、藝術家が意識的に働かしめる「技術 Kunst」に對して、藝術家を背後から無意識的に驅り立てる「詩情 Poesie」をば、自然の恩恵によつて賦與されたものと考へている（Schelling: System d. transz. Idealismus. Schellings sämmt. Werke. I. S. 619 ff.）ことも、天才の主觀的客觀的なる性格をば、物語つてゐる。即ち天才は、如何なる意識にも現われることなしに、意識的なるものに客觀的なるものを附加し、「意識的なるものと無意識的なるものとの間の豫定調和の普遍的根據を含んでいる、かの絶對者（原自我 das Urselfst）」にほかならない（op. cit. S. 615 ff.）。換言すれば天才は、「それ自身決して客觀的となることなく、しかもあらゆる客觀的なるもの原因たる、最高の絶對的に實在的なもの das höchste absolut Reelle」（op. cit. S. 619）であり、かの絶對的同一性のいわば觀念的側面として、主觀的意識的なるものと客觀的無意識的なるものとの、同一性の根據たるべきものでなければならぬ。ノヴァーリスの説く天才もまた、略これと同様の性格を有する。「天才とは諸器官を能動的に使用する精神にほかならない」（Novalis:



(Fragment)と語られる如く、それはあらゆる部分的精神機能の背後にある根本機能であり、感官を意のままに支配することを通して、外界をも自由に變容し得る能力である。「もしも我々が世界の律動を所有するならば、我々は世界をも所有する。全ての人間は、彼自らの律動をもつ。……律動的感官が天才である。」(Op. 33) 即ち天才は、律動を通して世界を自己のものとする感官にほかならないのである。しかしながらかかる浪漫的天才は、その構成要素に關して、更に深く究明されねばならない。天才が「想像の對象を現實の對象の如く論じ扱う能力」(Op. 33)であるならば、その本質は想像作用にあり、その中心的力は、想像力 Einbildungskraftとして捉えられてよいであらう。従つてまさしく想像力の中にこそ、浪漫主義の感情性と主観性との秘密が、隠されていると考えられる。では、カントの構想力より浪漫的想像力に至る間、Einbildungskraftは如何なる推移を辿り來つたのであるか。

〔註〕 Einbildungskraftは、カント・フイヒテ・シェリング等の哲學者に於ては、その藏する高い規則性の故に「構想力」と、浪漫派の藝術家達に於ては、その豊かな想像性の故に「想像力」と、譯されるのが適當と思われ。以下これに従う。

## 二 想像力

カントは『純粹理性批判』第一版の範疇の演繹に際し、認識の源泉たるべきものとして、感官・構想力・統覺の三つを擧げ(K. d. r. V. A. 94, A. 116) それらに對應して、(一)直觀に於ける覺知の綜合、(二)構想に於ける再生の綜合、(三)概念に於ける再認の綜合という、三段の綜合を展開する。その際しかし、第一版の演繹の二つの方向、所謂上からの方向(A. 116~119)と下からの方向(A. 120~122)とに於いて、構想力の説明に少なからざる差異が認められる。第一の方向に於いては、「構想力によるこの多様の綜合、根源的統覺によるこの綜合の統一」(A. 98)と語る如く、すべての個處に於いて構想力の根源的能力たる點が力説されており、綜合一般は全く構想力の所作であり、構想力の純粹

(生産的) 綜合の原理は、「統覺に先行してあらゆる認識殊に經驗の根據をなす」(A. 118)ものとして、統覺もこれを「前提」しなければならぬという。これに對して下からの第二の方向に於いては、生産的なるが故に如何なる幻覺の混亂に陥るかもしれない構想力をして、一定の對象を直觀せしめるべく限定するものが、統覺にほかならないと説明される。けれども、二方向をめぐるその様な言説の不統一を超え、第一版の演繹全體を強いて統一的に解釋せんとするならば、統覺は、覺知・再生(從つて感官及び構想力)による感性的内容と、規則(從つて悟性)によるその再認とを包括する、「一切包括的なる純粹統覺 eine allbefassende reine Apperzeption」(A. 123)たる意味に於いて、「綜合的統一が綜合を包含し」(A. 118)、統覺がより深く構想力を基礎づけるものと解するほかはあるまい。ともあれ、第一版の演繹論に於ける生産的構想力は、「人間の心の一つの根本能力 ein Grundvermögen 即ち先驗的(アッペリオリ)なすべての認識の基礎に存する能力」(A. 124)として、獨立の根源的能力と考えられ、成程一應統覺という最根源的なる制約の下に立たざるを得ないにせよ、統覺の原則たる「あらゆる現象の親和性は、また先驗的に規則に基づく構想力に於ける、綜合の必然的結果でもある」(A. 123)といわれる如く、むしろ構想力それ自體が、おのずから統覺の原則に一致しつつ、感覺と概念とを綜合するとも解せられよう。ところで『純粹理性批判』第二版に至つては、構想力の獨自の根源的機能は、疑問視されざるを得なくなる。そこでは明かに、一切の内容を綜合する「意識一般」(B. 143)或は「普遍的なる自覺」(B. 132)としての先驗論的統覺が、まさしく悟性的なるものと感性的なるものとの全體であり、構想力は、かかる統覺の綜合的統一の單なる契機に過ぎないと考えられる。感官・構想力・統覺を認識の三源泉とする第一版の思想はすでに姿を消し、構想力は獨立の能力であるよりは、むしろ範疇を圖式化する圖式機能として、單に先驗論的判斷力の作用の媒體である。以上の如く第一版と第二版とに亘つて、構想力の機能に少なからざる不統一が認められるのではあるが、しかしそれにも拘らず、構想力の感性的にして同時に知性的なる性格は、兩版を通じて同様に認められた。「我々のすべての直觀は感性的なる故、構想力は感性に屬しはするが、その綜合は限定

的 *bestimmend* であつて……自發性の行使であり」(B. 151 f.)、それは、「感官をその形式に關し統覺の統一に則つて先驗的に限定する」(B. 152) 限りに於いて知性的であり、「感性に對する悟性の一つの所作」(A. 40) として悟性的である。更に構想力の所産たる圖式・時間が、直觀として感性的であると同時に、純粹なるものとして叡智的であり、概念を形象化する爲の表象として形象 *Bild* を可能ならしめる意味に於いて、産出的自發的であり合法則的悟性的である點よりしても、構想力の感性的にして同時に知性的なる性格が肯げよう。けれども構想力のかかる性格は、理論的使用から美的使用へ移ることによつて、始めて鮮明に表われ來るのである。

カントは美的體驗の能力を、總括的には「美的判斷力」として捉えるのであるが、趣味判斷の分析に於いて明らか如く、その内容をなすものは、自由に遊動 *spielen* し合う構想力と悟性とであつた。そしてその場合の構想力は、悟性に規則を與えられて働くのではなく、如何に自由なる翼を以つて羽搏こうとも、常におのずからなる合規則性を宿し得る意味に於いて、自らの内に悟性を具有するのであり、美的判斷は悟性によらずして構想力により (K. d. U. § 1. Cassirer Ausg. Bd. V. S. 271)、『美に關する限り「悟性が構想力に仕える *diene*」のであつて、構想力が悟性に仕えるのではなく」(op. cit. allg. Anmerk. nach § 22. S. 313) ことより推して、美的判斷の中心的能力は構想力にほかならないと考えられる。また天才の分析に當つては、その構成能力として、概念を提示する悟性と、美的理念を産出する構想力と、美的理念の表現能力たる精神との三能力が数えられる (op. cit. § 49. S. 393) が、その際「天才は魂の一つの特殊な力 *Kraft* ではなく、あらゆる他の力を客觀の理念によつて生氣づける一つの原理である」(Reflexionen zur Anthropologie. Nr. 949 AK. Ausg. Bd. XV.) とされ、同時に精神も一つの特殊な才能でなく、すべての才能の生氣づける原理であり、天才の代りに精神という語を用いてもよいと語られている (op. cit. Nr. 933) 點よりして、嚴密には寧ろ「天才を形成する心意の諸力 *Kräfte* は構想力と悟性である」(K. d. U. § 49. S. 392) というべきであり、もとよりこの場合にも、構想力と悟性との自由なる遊動が成立するのであつてみれば、天才の本質的要素をなすものもまた、

美的判斷力或いは趣味に於けると同様に、おのずからなる合規則性を内面的に具有せる構想力にほかならないと考えられる。そして、この様に一面感性的受動的でありつつ他面先驗的「産出的自發的」(op. cit. Anmerk. nach § 22. S. 31)なる構想力の働きは、判斷(美的主觀的な特殊の性格のものであるにせよ)し得る直觀として、いわば知的直觀である。「直觀的悟性」なるものをあくまで人間に許さなかつたカントに於いて、美に關する限り「判斷的直觀力」が可能であつたということは、浪漫主義との關係に於いて、特に注目さるべき事柄であらう。

次いでフイヒテの知識學に於ける構想力は、「主觀を限定する爲に、その無限に進む活動の所産として無限なる限界を措定し」(Fichte: Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. Philo. Bihl. S. 136)「限定と非限定」、有限的なものと無限的なものとの中間に揺動 schweben する」(a. a. O.)ことによつて、あらゆる實在性を産出するものとして説かれる。我々の意識や生や存在の可能性、總じて人間精神の全機制は、かかる生産的構想力の活動に基づくのである。そして他面それは、定立と反定立によつて措定された主觀的なものと客觀的なものとを、總括的に固定せしめる「綜合の中に働く自我の能力」(op. cit. S. 126)「換言すれば自我と非我との」「一つの交替 Wechsel を限定する絶對的活動」(op. cit. S. 81)として、「自我と非我とを完全に合一せしめるのであつて、この様な「矛盾するものを合一する」(op. cit. S. 137)構想力の統一的活動によつて、「我々は……受動によつてのみ可能な能動と、能動によつてのみ可能な受動とを、全く確定的にもつ」(op. cit. S. 147)ことが出来る。即ち、實在的事物をば意識に先行して無意識的に生産する構想力は、同時に直觀を反省することによつて、直觀されたものの形象 Bild を意識的に再生するのであり、この様な生産的 produktiv と再生的 reproduktiv との二面的活動によつて、事物と表象との間の調和をば可能ならしめるのである。またフイヒテに於いては、直觀形式たる空間時間のみならず、カントに於いて悟性に歸せられた範疇すらも、構想力に起源をもつものと考えられ、更に悟性そのものも、構想力によつて産出された變動し易い直觀を概念に固定せしめる意味に於いて、生産的な構想力と限定的な理性との中間的能力として、いわば「理

性によつて固定された構想力、或いは構想力によつて対象を供給された理性として記載され得る」(op. cit. S. 159)のである。カントの未解決に遺した物自體の問題に關しても、一面それが自我の内に在るとされる場合には獨斷的觀念論が成立し、他面それが有限的精神の外部の絶對的なるものとして獨立に存在すべきものとされる場合には獨斷的實在論が成立する (op. cit. S. 93) のであるが、かかる兩立場の間を搖動しつつそれらを同時に反省することによつて、自我と物自體との關係に解決を與えるものが、創造的構想力の營みにほかならないと考えられた (op. cit. S. 201)。この様にフィヒテに於いては、「人間精神のあらゆる仕事は構想力から出發する」(P. P. O.) のであり、それは無限と有限、自我と非我との間を搖動しつつ、かの三原理の背後にあつて意識の事實の根源をなし、知識學の諸對立の最奥の綜合的役割を果たすものであつた。

カントに於いて美的地域の中心的作用を擔い、フィヒテに於いて理論的・實踐的兩領域の根源的能力とみなされた構想力は、やがてシェリングやノヴァーリスに於いて、彼等の美的性格と相俟ち、遂に全人間生活を貫く最高能力の地位を占めるに至つた。シェリングの『先驗論的觀念論』は、「自我は自我である Ich = Ich」という絶對的な綜合命題(知的直觀による絶對的自覺)をば、種々の勢位に於いて繼起的に展開してみせるものであるが、かかる自我の意識的活動(觀念的なるもの)と無意識的活動(實在的なるもの)との合一が、外的客觀に於いて捉えられるのが理論的・實踐的並びに目的論的領域であり、自我そのものの内に論證される究極の最高段階が、藝術の領域である。先ずフィヒテの理論的知識學に彷彿たるその理論哲學部門に於いて、「生産的直觀」によつて絶えざる非我の生産をなすと説かれる「生産能力 produktives Vermögen」は、フィヒテの所謂生産的構想力以外の何ものでもないであらう。次いで實踐哲學部門に於いては、意欲が、一般的な外的客觀に向かう無限的自由性と、あくまで一定の特殊の客觀を表象すべく強制される (Sy. d. tr. Idealismus. säm. W. 13. S. 558) 有限的被制約性とを有するに當り、これら相對立する兩性格、換言すれば實踐的なるものと理論的なるものとの間に搖動しつつ、兩者を媒介するのが、構想力である。構

想力はかかる揺動によつて、それ自身無限性と有限性との間に揺動する或るもの、即ち理念をば必然的に生産するのであり、「一般に理論理性と呼ばれるものは、自由に仕えている構想力 *die Einbildungskraft im Dienste der Freiheit* にほかならない」(op. cit. S. 559)と語られる如く、それはまさに理性をも意味するに至るのである。また最高段階たる藝術活動に於ける構想力は、意識的なるもの(技術)と無意識的なるもの(詩情)、或いは有限的なるものと無限的なるものとを完全に一致せしめる——美は有限的に表現された無限者である (op. cit. S. 620)——ことによつて、絶対者の啓示たる藝術作品をば産出する。そしてこの「詩作能力 *Dichtungsvermögen* は、最高の勢位に於いて繰り返される生産的直観にほかならず、生産的直観と詩作能力とに働いているものは同一のもの、即ちそれによつて我々が矛盾するものを考え總括し得る唯一のものたる、構想力である。」(op. cit. S. 626) 換言すれば、一方意識の彼方の現實の世界として現われ、他方意識の此方の觀念的世界として現われるものは、すべて同一能力たる構想力の所産ではない。ただ兩者に於いて異るところは、構想力の活動が、生産的直観に於いては被制約的にして濁り、美的直観に於いては無制約的にして純粹なる點に存する。更にはまた、『先驗論的觀念論』の出發點に於いて總括的に説かれる「知的直観 *intellektuelle Anschauung*」そのものもまた、美的直観と等しく、構想力の活動として理解され得るであらう。本来、絶對的に非客觀的なる純粹生産活動としての自我が、それにも拘らず知識の客觀たり得る爲には、「自我が自己自身に對して客觀となる如き生産作用、即ち知的直観作用 *ein intellektuelles Anschauen*」(op. cit. S. 370)を必要とするのであるが、「美的直観は單に客觀的となつた知的直観にほかならず」(op. cit. S. 627)これら「知的直観と美的直観との二つの極端の間に哲學の全體系がおさまる」(op. cit. S. 351)のであつてみれば、知的直観(哲學的生產)と美的直観(藝術的生產)とは、ともに同一の生産能力たる構想力に基づくと考えられるほかはない。かくて、『先驗論的觀念論』の全體系の根源的能力は、「自我」の活動一般を可能ならしめる構想力として捉えられ得るであらう。

『ブルーノ』と『藝術哲學』に於いては、かかる美と眞との本質的同一性が、絶對的立場から一層明確に語られる。成程絶對者が、原像の主觀的に把握される場合に眞が成立するに對し、對像的客觀的に表現される場合に美が成立するのであるが、超現象的なる美そのものは、ほかならぬ原像そのものである意味に於いて原像の認識たる眞と完全に一致し、兩者は共に、「普遍的なるものと特殊的なるものとが、神の形態に於ける如く絶對的に一つである如きもの」(Bruno. säm. W. I 4. S. 243)、『換言すれば無限的なるものと有限的なるものとの統一たる「永遠なるewig」(op. cit. S. 247)』ものであり、従つて思惟と直觀との統一たる「思惟的直觀」によつてのみ把握され得るのである。ここに至つて構想力は、單に藝術體驗を可能ならしめるのみならず、觀念的なるものと實在的なるものとの同一を根源的に可能ならしめることによつて「一切の創造を基礎づける同一化の力 die Kraft der Ineinbildung」(Ph. d. Kunst. § 22. säm. W. I 5. S. 386)であり、同時にそれはまた、かかる In-eins-bildungs-kraftたることを通つて一切の個體存在を可能ならしめる、「本來的に創造的なる個別化の力 die Kraft der Individuation」(a. a. O.)でもある。それは、もはや單に多様を統一する力たることを超えて、個別的な多様そのものを産出する力として、自己意識のみならず、全宇宙的存在の根據たるべきものであつたのである。

ノヴァーリスの想像力もまた、もとより單なる外的感官に盡きるものではなく、「我々にすべての感官を補充し得る」(Novalis: Fragmente) 如き、外的刺戟から自由なる「作用的原理」(op. cit.)であり、「感性和悟性との結合せる創造的形成的力 schaffende bildende Kraft」(op. cit.)であることを超え、理性をも含めて、「一切の内的能力と力、一切の外的能力と力とが、そこから演繹されるべき」(op. cit.)根源的な統一的原理を意味する。即ち「創造的想像力は、理性と判断力と感官力とに分かたれる」(op. cit.)のであるが、その中理性は、「想像力に」コレクティブ・インテリゲンツ致してその法則を含む」(op. cit.)意味に於いて、「想像力の法則とも呼ばれる」(op. cit.)。それ故ノヴァーリスに於いては、一切の心的力の中、最も自發的能動的なるものが、想像力にほかならない。「感情と悟性と理性とは、或る程度受動的であ

る。……それに反して想像力のみが力 Kraft である。これのみが活動するもの das Tätige——動かすもの das Bewegende である。想像能力 Einbildungsvermögen と同じなのはなし——能力は受動的である。」(op. cit.) したがりに於いて想像力は、すべてを一ならしめる「結合的中項 das verbindende Mittelglied——綜合 die Synthese——轉換力 die Wechselkraft」(op. cit.) であり、まさしく「統一性が想像力である」(op. cit.) とどうべきであろう。かかる想像力の作用によつてこそ、かのノヴァーリスの浪漫的主觀主義もまた、成立することが出来た。「想像は未來の世界を我々に對して、高所に或いは深所に或いは輪廻におく。我々は宇宙の旅を夢みる。いつたい萬象は、我々の内にないのか。」(op. cit.) 魔法的觀念論に於けるこの様な(自我による宇宙の)「代現 Repräsentation」(op. cit.) は、一切の可能的なるものを直接的に現實的たらしめる想像力によつて支えられており、外界とは、いわば「神秘の状態へ高められている内界」(op. cit.) であり、究極的には「感覺によつて知覺され得るところの……想像力」(op. cit.) にほかならない。そして「想像力の二種の産物たる眞實と假象とが、同一的である(眞實は假象の形式であり、假象は眞實の形式である)」(op. cit.) 爲には、高い意味に於いて、「生産的想像力の規則は、直接的法則(規則)と間接的法則(無法則)との綜合」(op. cit.) でなければならぬ。即ち浪漫主義に於ける想像力は、シュトゥルム・ウント・ドラング的な奔放性に盡きることなき、人間諸能力の統一者でなければならぬと同時に、更にカントにみられる如き、自然と道德との反省的統一としての、美的合目的性の能力に止まるものであつてもならない。すでに觀た如く、カントに於ける美的なるものの産出性の源泉は、構想力の無限的創造性であつたが、しかし主觀と客觀、藝術と自然との相對的對立が存する限り、構想力の自由性もまた、自然よりの遊離を免れ得なかつた。従つて構想力が眞に存在一般と一致し得る爲には、もはやカントの二元論を超えて、能産的自然の創造そのものを以つて藝術と解する如き、絶對的創造説(自然模倣説と主觀的創造説との綜合)に、移行せざるを得なかつたのである。人間の根源的創造性は、同時に彼の做わんと努める nachzueben 能産的自然の根源的創造性に合致する意味に於いて、創造的想像力(構想力)



は、ノエシス的自然の根源的創造力そのものの顯現でなければならぬ。かくて「想像イマジンは、如何に大膽な飛翔を遂げても、決して自然的 *auf natürlich* とはなり得ない（たとえ超自然的 *über natürlich* とはなり得るにせよ）」（W. Schlegel: *Vorlesungen über schöne Literatur u. Kunst*. hr. v. Minor. Bd. I. S. 100）と云ふべく、「無規則の規則」としての想像力は、夢と現實との間を搖動することによつて、虚構と眞實とを綜合し得るのである。まこと想像力による「知的直観の中にこそ、人生の鍵がある」（Novals: *Fragments*）のであつて、獨逸浪漫主義は、かかる想像力を中心とせる「新しい主観主義」として把握されるであらう。ただし、想像力が如何に反省的知性的性格を具有するとはいえ、浪漫主義者が純粹なる感情に全幅の信頼をおく以上、もしも彼等が感情を理解せんとし、或いは感情自體が生活的であらんと欲する場合には、もはや感情そのものが失われるに至る意味に於いて、所詮彼等（殊に後期浪漫主義者）は、感情への沈潜もしくは感溺に至るべき運命をば擔つていたのである。

（筆者 京都府立醫科大學〔倫理學〕助教授）